

# 市橋文庫蔵『弥生日記』訳注（六）

## 愛知県立大学稀書の会

本学学術情報センター市橋文庫には、岡崎の俳人鶴田卓池と刈谷の俳人中島秋拳が編纂した『弥生日記』の刊本を蔵する。稀書の会では、地域の文化及び文化交流史の考究・紹介を目的として、本学が豊富に蔵する古俳書資料のうちから、この『弥生日記』を選び、その読解に取り組んでいる。今年度の紀要原稿は、卓池・秋拳の弟子たちの来訪とその携えてきた句を記述した箇所をとりあげ、輪読による討議を経て、紀要用に成稿した。本年度の担当者は、加藤希（大学院国際文化研究科前期課程一年）、香村彩（大学院国際文化研究科前期課程一年）、狩野一三（名古屋デンタル衛生士学院非常勤講師）、伊藤伸江（本学教員）である。

### 【凡例】

一、底本は文政七年五月名古屋久兵衛版『弥生日記』愛知県立大学学術情報センター市橋文庫蔵（ICHI・142）本である。

一、翻字本文は、文政七年版を忠実に翻刻した。本文掲出にあたっては、【翻刻】に本稿で扱う箇所を一括掲出し、【本文】に、次項に記すような改訂を加え作成した本文を記し、【注釈】部分には、注釈の便を考慮して適宜分割した

形でとりあげた。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記に改め、必要に応じて濁点を付し、句読点、送り仮名を補った。翻字本文を適宜参照されたい。原文の表記の誤りかと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が（ ）書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いた。

一、訳注においては、【本文】、【季・季語】、【作者】、【語釈】、【現代語訳】の項目を設け、必要な場合には【考察】の項目も設けた。

一、【語釈】にあげた和歌、連歌、俳諧などの引用は、後述引用文献に依る。読解に有効と考えられる場合には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。引用にあたっては私に濁点を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じて平仮名に改めた。

### 【翻刻】

人もこす心もちらて山さとは花

をみるにもたよりありけりと

西上人のよまれたりけるをけにもと

おもひつゝくる夜朱樹翁のいま

そかりし世のことなとつとく語りあいつゝ

炭俵の俳諧などもよみていたく

夜の更行は蒲団引合丸寝せんとす

静坐

一 九ウ

花に星是もねかひのひとつかね  
六龍

赤守朝とく枕あけて身のうさ

のかくれ家にせん山さとは心ありて

そ住へかりけるといへる哥いく度も

吟しつゝ

うくひすや柴のけふりをたてなから  
赤守

すこし東の方へ出れば平原あり

柿の木二本井ひとつあり葛西カサヤ

角の屋敷といふなり足まめの巢李

此所まで行たりとて

菜花やみかすむほと屋敷あと  
巢李

古董より文来たる新城三ヶ日

の里の発句も聞ゆ

燈のつけたよりある蛙かな  
守山

戸を引てあともとりするかすみかな  
蝉禾

馬の子のよろこびいふやはるの雨  
古董  
「十ウ

十七日桜タラの芽つみて屋頃かへる

戸口に裂昏して句をしるしたり

家に人なし繁ハコベの花に啼すゝめ  
卮言

気みしかの唇言あはてかへりしも

をかしをかしといへは弥生のはしめ

もらひ置けるを思ひ出てけふその

残酒に興催しけるもまたくをかし

十九日

ある人のもとより若鮎

をおくる外に一ツの包ありひらけは

所々よりの消息

蛙啼て夜をなくさめる庵かな

うくひすは声へたつほといさきよし

見に来たる証処にたをるさくらかな

あふら手をあらひに出てやもゝのはな

山吹や舟からみれば八重一重

花に来てきうにはつかぬたちはかな

るすさせた猫も恋には出ぬけけり

菜の花のはるは七十五日かな

院々の梅や秀し花くはり

鶯に起かつた日やこゝろまめ

嫌はれて来しかしつかにかへる猫

つきあはず膝や余寒の杉曇り

沾路

柳涯

程連

藤架

保舟

渭川

鳳兮

方鼎

阿籟

甫鶴

金毛

巴東

「十一才

「十一ウ

明そむる夜や花くらみ花あかり 吳江 「十二才

寐た良を見はやつはめの初やとり

公雅

鷺にひとりつゝこす土橋かな

仮物

船道と行きかひなり雪解水

支方

山吹のつらりと藤の裳かな

士長

【本文】

人もこず心もちらで山里は花を見るにもたよりありけりと、西上人の詠まれたりけるを、げにもと思ひつづくる  
 夜、朱樹翁のいまそかりし世のことなど、つとつと語り合ひつつ、炭俵の俳諧なども読みて、いたく夜の更け行  
 けば、蒲団引き合はせ丸寝せんとす。

【語釈】●人もこずくたよりありけり：西行歌。「人も来ず心も散らで山里は花を見るにも便ありけり」（板本系山家集・題知らず・1037）。陽明文庫本山家集では「人もこず心もちらで山かげははなをみるにもたよりありけり」（陽明文庫本山家集・題しらず・1037）。第三句から考えておそらく、卓池たちは、江戸期に広く流布した板本系山家集を見ていたのであろう。●西上人：西行上人。「西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方二町計わけ入ほど、柴人のかよふ道のみわづかに有て、さがしき谷をへだてたる、いとたふとし。」（野ざらし紀行・芭蕉）。芭蕉が尊崇した西行は、江戸期には、俳人の間で非常にもてはやされた。「かの西上人の、へ千代経ふべきものをさながら集あつむとも君がよはひをにしらんものかは、とも問んには……」（嵐牛文集拾遺抄・賀青々老師ノ転庵ヲ）。「わすられぬ時也日也西行忌」（嵐牛発句集・春部）。●朱樹翁：井上土朗（1742～1812）。名古屋の医師、俳人。卓池と秋拳は土朗の門人であった。『弥生日記』の舞台となった花園山での滞在がなされた文政七年は、土朗の十三回忌にあたり、二人は『安居鐘』を編纂し、『弥生日記』と

同じく書肆本屋久兵衛から刊行している。●つどつど……いちいち細々と。くどくどと。本訳注(六)の発句作者らの間でよく使われた表現のようである。「覆かかる合歡の梢を笠にして／つどつどくぞる夏の黄鳥」(『はなのわたり』(文政十年二月五日於刈谷十念寺追善秋拳翁脇起之百韻)・吳江／士徳)。●炭俵：芭蕉七部集の一。卓池と秋拳は、花園山滞在中に炭俵調の両吟歌仙も張行している。●引き合はせ：寄せ合わせて一緒にして。●丸寝：着物を着たままごろ寝をすることをいう。気のあう同士、俳諧の話に夢中な夜の様か。

### 【現代語訳】

「人も来ず心もちらで山里は花を見るにもたよりありけり」(誰も訪ねて来ないし、余計な気遣いをするのもなく、私の住む山里は、花を見るのにも絶好の場所であるよ)と西行上人がお詠みになったことを、本当に(ここも)そうだなあとしみじみと思いつつ、朱樹翁が存命でいらつした頃のことなどを、細々と語り合いながら、『炭俵』の俳諧なども読んで、たいそう夜が更けたので、蒲団を寄せ合わせて敷き、そのままごろ寝をしようとする。

(伊藤伸江)

### 【本文】

静坐

花に星これも願ひの一つかな

六龍

【季・季語】春(花)

【作者】六龍 生没年不詳。板倉塞馬の広島旅行記『いほはた集』(文政八年刊)内、「茅屋の机上に積かさねし吟」と題して集めた発句中に「汐かぶるむぐらも青む四月かな」という句がある(『板倉塞馬全集』)。豊橋の門人の発句群中にあるので、六龍も豊橋の人か。

## 【語釈】

●静坐…心を静めて座ること。儒教・仏教において用いる語句。「北に三疊のおくまりたる所…爰に襖さし、ともし火をかかげて、読書静座のかくれ所とす。」（鶉衣・閑居記）。「静坐」と書かれ句が詠まれたものに「睡気さす魔を蹴て行や子規」（弁華集・260）、「雨窓を打て吾に月ある今宵哉」（たびしうい・188・井眉）など。●星…「欲し」をかけるか、不明。

## 【現代語訳】

静坐（をして詠んだ句）

美しい花に、夜空の星が加わった。この景色もまた心を静めて思う私の願いの一つであることよ。

六龍

（伊藤伸江）

## 【本文】

赤守、朝とく枕あげて、身のうさのかくれ家にせん山里は心ありてぞ住むべかりけるといへる歌、幾度も吟じつつうぐひすや柴のけぶりをたてながら 赤守

【季・季語】 春（うぐひす）

【作者】 赤守 「吉田西町・福谷金作」（『諸国人名録』B本）。豊橋（吉田）在住の門人。福谷世黄。通称油屋藤左衛門。また金作。のちに水竹と改名。嘉永三年（1850）没。

【語釈】 ●身のうさの…西行の歌。「身の憂さの隠れ家にせん山里は心ありてぞ住べかりける」（版本系山家集・五首述懐・910）。我が身のつたなさを思い知った時には、山里を住まいとして、仏道をめざし、自然の風情を味わいながら住むのがよいのだという歌。●柴のけぶり…炭焼きのために柴をたく煙。人里遠く離れ、寂しい山里の象徴として、使われている。「あはれなる遠山はたのいほりかなしばの煙のたつにつけても」（玉葉集・山家の心を・順徳院・2237）。山家

集には、西行が、出家し仁和寺の奥に住む人を訪ねた時の贈答歌があるが、出家者の「立寄りて柴の煙の哀さをいかが思ひし冬の山里」という歌に、西行は「山里に心は深く入りながら柴の煙の立ち帰りにし」と答えている（版本系山家集 736、737）。卓池・秋拳の花園山の麓での花の時期の仮住まいは、弟子たちには、「山里」住みと見え、「心ある」「山里」住みを理想とする西行歌によってほめたたえられたのであった。

### 【現代語訳】

赤守が、朝早く枕を片付けて、「身のうさの隠れ家にせん山里は心ありてぞ住むべかりける」という歌を、何度も吟じながら（次の句を詠んだ）

うぐいすが鳴いているよ。この山里で、柴をたく煙を立てながら聞くことだ（なんと理想的な住み方でしょうか）。

赤守

（伊藤伸江）

### 【本文】

少し東の方へ出れば、平原あり。柿の木二本、井一つあり。葛カサイ西角の屋敷といふなり。足まめの巢李、此所まで行きたりとして

菜花やみかすむほどの屋敷あと

巢李

【季・季語】春（菜花）

【作者】巢李 「田町 松岡幸吉」（『諸国人名録』B本）。岡崎の門人。「田町」は現在の岡崎市田町。巢李は文政から嘉永年間にかけて足助俳諧資料に多く登場する。

【語釈】●葛西：花園山の東の地名か。未詳。●足まめ：足が達者。苦勞をいとわずによく歩くことをいう。●菜花や：「菜花」は和歌などにはほぼなく、俳諧にはじめて登場する語。●みかすむ：不明。「見かすむ」か。「菜の花や雨に

「ながるる田土壁」(青々処句集・76)。

【現代語訳】

少し東の方に出ると、平原がある。柿の木が二本と井戸が一つある。葛西角の屋敷というのである。健脚の巢李は、この場所まで行ったというので

菜の花が咲いていることだ。一面にぼうつと霞むように菜の花が見えている屋敷の跡よ。

巢李

(伊藤伸江)

【本文】

古董より、文来たる。新城・三ケ日の里の発句も聞ゆ。

燈のつけたよりある蛙かな

守山

【季・季語】春(蛙)

【作者】守山 赤谷勘右衛門。新城上町の門人。

【語釈】●新城・三ケ日の里：新城は現在の愛知県東部に存する新城市。三ケ日はかつて遠江国引佐郡にあった里で、現在は静岡県浜松市北区の一部。●燈のつけ：暗くなり燈をともし時期となったことを知らせること。●たよりある：縁がある。ここでは燈をつけた瞬間から蛙の鳴き声が激しくなったということではないか。

【現代語訳】

古董から手紙が来ている。新城、三ケ日の里の門人の発句も言ってよこしてくる。

燈をともし時になったことを知らせるきつかけとなるような、蛙の様子であることよ。

守山

(伊藤伸江)

【本文】

戸を引て後戻りするかすみかな

蝉木

【季・季語】春（かすみ）

【作者】蝉木 石川新六。三ヶ日（静岡県浜松市）の門人。

【語釈】●戸を引て…引き戸を引いて。「ひき」は進んできたものが退くこともいい、霞が後退するように見えることも掛けている。●後戻りする…もときた方向に戻ることに。

【現代語訳】

引き戸を引くかのように、春霞も退き後戻りするように見えることだよ。

蝉木

(伊藤伸江)

【本文】

馬の子のよるこびいふや春の雨

古董

【季・季語】春（春の雨）

【作者】古董 ？～天保十一年（1840）。佐野氏。蓬宇の父。

【語釈】●馬の子…子馬。春に生まれる。「馬の子の家にかへるや梅寒し」（しら雄句集・梅・34）。「馬の子の故郷はなるる秋の雨」（二茶集（発句編）・享和三年）。●よるこびいふ…慶事に対して祝いを述べる。ここでは子馬が生まれたことへの祝辞を述べる。●春の雨…春雨が野をうるおすと、草木が芽吹くことから、万物に命をもたらすめぐみの雨とされ、御代を寿ぐ歌にも用いられる。「春の雨のあまねき御代をたのむかな霜に枯れゆく草葉もらすな」（新古今集・藤原有家・1478）。「馬までも旅籠泊まりや春の雨」（二茶集（発句編）・文政二年）。

【現代語訳】

馬の子が生まれたお祝いを述べることよ、草木の芽吹きをうながす春の雨が降る中で。

古童  
(伊藤伸江)

【本文】

十七日、桜の芽つみて昼頃かへる。戸口に裂帟して句をしるしたり。

家に人なし繁叢の花に啼くすずめ

扨言

気みじかの扨言あはでかへりしも、をかしをかしと言へば、弥生のはじめもらひ置きけるを思ひ出でて、今日その残酒に興催しけるもまたまたをかし。

【季・季語】春(繁叢)

【作者】扨言 二本木 藤浦十兵衛 「名こや手代町 秀嶋屋十兵衛」(『諸国人名録』B本)。二本木の方の名には全てミセケチが付けられているため、養子に入るなどして転居したか。『はなのわたり』(文政十一年刊行の秋拳一周忌の追善俳句集)「題花」に一句あり、名前が見える。秋拳と関係があったか。

【語釈】●桜の芽：楸の木の芽のこと。山菜として各地で食べられる。(cf.楸の木：ウコギ科の落葉小高木。日本や朝鮮、中国北部、サハリンなどの山野に育つ。夏になると、白黄色の小さな花を咲かせる)。●裂帟：裂いた紙。破れた紙。持っていた紙を裂いた、切れ端を指して言うか。●繁叢：ナデシコ科の越年草。各地の路傍や休耕中の田畑や園庭などに生える、代表的な雑草の一つ。春の七草の一つ。はこべら。はくべら。「はこべらも実をもつ花は有てふに」(葛本集・上 春之部・六歌仙賛 小町・193)。●啼くすずめ：「菜の花に口ばしそめて啼すずめ」(枇杷園句集・春72)。「はなに来てあしらひ啼やぬれ雀」(はなのわたり・題花・耳牆)。

## 【現代語訳】

十七日、穂の芽を摘んで昼頃に帰る。戸口に裂いた紙を貼って句を書き記してあった。家に人はいない。ただ繁縷の花に鳴く雀がいるだけだ。

扨言

気短の扨言が会わずに帰ってしまったのも、「(彼らしく)可笑しい、可笑しいことだ」と言うのと、三月の初めの頃に扨言からもらって置いてあったのを思い出して、今日その残り酒を楽しんだことも、はたまた笑ってしまうことだ。

(香村彩)

## 【本文】

十九日。ある人のもとより若鮎をおくる。外に一つの包あり、ひらけば所々よりの

消息、

蛙啼きて夜をなくさめる庵かな

沾路

## 【式目】春(蛙)

【作者】沾路 不明。『はなのわたり』「四季雑詠」の中に一句あり、名前が見える。秋拳と関係があったか(『西三河の俳人 中島秋拳』)。

【語釈】●消息…近況などを伝える手紙や便り。●蛙…「までど来ぬ人や遠音になく蛙」(青々処句集・待恋65)。「草庵の夜をあづけたる蛙かな」(蔦三句集・上 春之部・蛙田にし(螺)139)。●なぐさめる…心がなごやかに静まる。気がまぎれる。

## 【現代語訳】

十九日。ある人のもとから、若鮎が送られてきた。外に一つ包みがあり、開くと所々よりの消息が書いてある、蛙が鳴いている声で、一人庵で寝る夜の寂しさがまぎれることだなあ。

沾路

(香村彩)

## 【本文】

うぐひすは声へだつほどいさぎよし

柳涯

【季・季語】春(鶯)

【作者】柳涯 「大寫陳や 大村権兵衛」(『諸国人名録』B本) 三河大島陣屋は現在の豊田市東大島町林地区に位置する。

【語釈】●うぐひす…「椽先や啼鶯のすこやかさ」(秋拳句文帖 一一・文化十三丙子 春)。「うぐひすやほうと引音も日の永き」(句叢十二(安政三年)・塞馬)●へだつ…空間的に距離がある。離れている。「いく千里へだつおもひや秋の暮」(もとの水、芭蕉袖日記、一葉集、句解参考 六介・六兵衛の二人に芭蕉庵を訪れて、古郷の安否を聞)。「鶯の声遠き日も暮にけり」(蕪村句集 落日庵・明和六年)。「鶯の比叡をうしろに高音哉」(書簡一五六・「書簡」に「うぐひすの高音、あたらしき心地二候」とある)●いさぎよし…自然の事物、風景などが清らかですがすがしい。明快で心地よい。「いさぎよし春をも待たで梅の花」(句叢十三・塞馬)。

【現代語訳】うぐいすの鳴き声は、遠く離れたところから聴く方がすがすがしく聴こえる。

柳涯

## 【補注】

『秋拳句文帖』一(文化四年夏卯月)によれば、秋拳による鶯の鳴き声についての俳文があるので示しておく。

鶯

うぐひすの時しりがほにほうと初音を告しより、おのづから月日もあらたなるこちぞせらる。身に若草のすり衣きて、梅には華やかなるけしきをそへ、竹にはのどけきはるをあらはしぬ。初花のはつはつなるにも身をよせて、落花のころは花と共に乱鶯の名を得たり。みるもの、おもふもの、是といひかれといひ、おろかにはるを見すぐさざるは、めでたき此鳥にこそ。

(加藤希)

【本文】

見に来たる証拠に手折るさくらかな 程連

【季・季語】春(桜)

【作者】程連 『はなのわたり』によれば尾張の俳人。『はなのわたり』の「四季雑詠」の部に本句が入集している。

【語釈】●証拠：事実であることを明らかにする拠り所。あかし。「春といふ証拠にたつや朝霞」(毛吹草・巻第五・春・宗治・379)。  
●手折る：花や枝などを、手で折り取ること。「馬の鞍ふまへて手折る桜花」(暁や(五十韻)・梅額・9)。

【現代語訳】花見に来た証拠に、桜の枝を手折ることだなあ。

程連

(加藤希)

【本文】

あぶら手をあらひに出てや桃の花 藤架

【季・季語】春(桃の花)

【作者】藤架 「鳴海 小松屋清三郎(古人」とあり)」「諸国人名録」B本)

【語釈】 ●あぶら手…油のついた手。油で汚れた手のひら。「あぶら手を行燈あんどにすかす夜寒哉よさむ」（藤の辻・塞馬）。 ●桃の花…「咲そろふほど桃の花桃の花」（榎堂句帖）（文化四年）。

【現代語訳】 油で汚れた手を洗いに外へ出たら目の前に美しい桃の花が咲いていた。

（加藤希） 藤架

【本文】

山吹や舟からみれば八重一重 保舟

【季・季語】 春（山吹）

【作者】 保舟 「松江 国松十兵衛」（『諸国人名録』 B本、「松江」は人名録配列から三河国松江とわかる）。三河国松江の鑄物師国松十兵衛光邦。士朗、秋拳の門人で、榎堂の句友。文化九年七月二十二日、岡崎の宝福寺で行われた士朗追善の百韻興行に参加している。文化十二年に秋拳が東都旅行をした折、保舟を同伴した。また、榎堂四十賀に「名月やひろい世にまた広いかげ」という句を寄せている。『はなのわたり』の「追加」の部に「葉わかれてもぬかぬ辛子菜」「さみだれや日もかさねぬに苔の花」が入集している。

【語釈】 ●山吹…バラ科の落葉低木、山間の湿地に多く、群生する。『毛吹草』の「連歌四季之詞」の項目に「末春歎冬」とある。「山吹や八重の重みを岸のうへ」（新類題発句集・支百）。 ●八重一重…幾重にも重なるさま。また、花が八重のものの一重のものがあること。「八重一重咲く山吹の花の色を流れにうつするでの玉川」（為村集・春の部・130・歎冬）。

【現代語訳】 山吹よ、舟から岸边に咲くものを見ると、八重のものの一重のものがある。

（加藤希） 保舟

## 【本文】

花に来てきうにはつかぬたちばかな

渭川

## 【季・季語】春（花）

【作者】渭川 「有松 井桁や安兵衛」（『諸人名録』B本）。有松は現在の名古屋市緑区有松町。井桁屋は有松絞を生業としており、天保五年の「絞染職取締定箇条書」「絞染職株定書」（ともに竹田嘉兵衛氏所有、『有松町史』所収）には、「井桁屋安兵衛」の名が見える。渭川本人が親族であるかは確証がないが、有松絞の家系であったことが推測される。『はなのわたり』に二句入集。うち一句は本句。『あざぢ酒』（文政八年刊行秋拳編の足助の山田真文三回忌追善集）に入集している（『板倉塞馬全集』）。

【語釈】●はな：『はなのわたり』「題花」に入集していることから、桜の花であると分かる。「塵掃ん花に人來と鳥がなく」（青々処句集・84）。「咲もちるも花はをしげのなかりけり」（曙庵句集・春・花ほどうつくしき物はあらじ。はじめをはりのすみやかなれば、人もかくありたき物なれといひつつ、花にさしむかひて）。●つかぬ cf. つく（築）：土や石を突き固めて、建造物の礎や塀・堤防などを造る。あるいは塚などを造ること。ぎずく。●たちは（立場）：立っている場所。また、立つための場所。／たちは（立端）：足を踏んで立つための場所。踏み所。『西三河の俳人 中島秋拳』では、『はなのわたり』に入集した当句について「たちば」と濁点を付している。「立場」「立端」ともに意味は大きく変わらず、どちらとも考えられるが、今回は「立場」を採用したい。ここでは、花見のための場所。

【現代語訳】花のところへ来たからといって、急にはできあがらない花見の場所であるなあ。

渭川

（香村彩）

## 【本文】

留守させた猫も恋には出ぬけり

鳳兮

## 【季・季語】春（猫）

【作者】 鳳兮 「鳴海 児玉源右工門」〔『諸国人名録』 B本〕。鳴海は、現在の名古屋市緑区鳴海町・相川・潮見が丘・久方の一带（『日本歴史地名大系 愛知の地名』）。『あさぢ酒』に入集。

【語釈】 ●留守：主人の不在中、その家の番をすること。留守番をする。「辻々に大泥坊がはやるなり／猫とふたりで留守をして居る」（かかる夜を（歌仙）・文政五年四月・膳の月・15／16一茶）。 ●猫も恋 cf. 猫の恋：春に雌猫が雄猫を恋うこと。猫が交尾期になること。猫の妻恋い。猫盛る。「面愧やつらかかれたるねこの恋」（秋葎句文帖二・文化十四年乙丑 春）。「芦火踏で飛わかれけりねこの恋」（青々処句集・50）。 ●出ぬけ（出抜け）：通り抜ける。ここでは、家の扉などを通り抜けて出ていくこと。「麦畑や出ぬけても猶麦の中」（炭俵・2495・野坡）。

【現代語訳】留守番をさせた猫も、恋なら家から出てしまったことだなあ。

鳳兮

【考察】 鳴海には、京から数えて十四番目の宿場である鳴海宿があり、宿駅に置かれた西の間屋場は、花井の児玉家が務めていた。児玉家の当主当主児玉源右衛門重辰は、芭蕉の鳴海六俳人の一人に称される。重辰は芭蕉と歌仙を巻いたこともあり、

田の隅を刈残してや鳴の声

海を田に埋めて鳴くなるちどり哉

などの句を残している（『緑区の歴史』）。『諸国人名録』に重辰と同名の児玉源右衛門と記されていることから、鳳兮は重辰の直系の子孫と考えられる。

（香村彩）

【本文】

菜の花のはるは七十五日かな

方鼎

【季・季語】春（菜の花）

【作者】方鼎 「刈谷 六戸隆喜（「古人」とあり）」（『諸国人名録』B本）。『はなのわたり』に一句入集。『あざぢ酒』に入集。『あざぢ酒』が文政八（一八二五）年、『はなのわたり』が文政十一（二八二八）年であるため、その頃はまだ存命であったと考えられる。

【語釈】●菜の花：「梅桜はいふもさらなり、ものみな華やかに、これといひかれといひ、はるはめづるものあまたあるが中に、あるじ古陶は菜花をめづるのひとくせあり。そのゆへよし、いかなるおもむきといふはしらねど、そもなのはなはさかりひさしうしてしかもながめあかず。そのさまつややかにしづかにして、鄙てまたゆたかなり。」（秋挙句文帖三 菜花園）。●はる：春。人生の中で、勢いの盛んな時期。最盛期。ここでは、菜の花の真つ盛りな時期を指す。●七十五日：『徒然草』第百六十一段に「花のさかりは、冬至より百五十日とも、時正の後七日とも言へど、立春より七十五日、大様違はず。」とある（『新日本古典文学大系 方丈記 徒然草』）。

【現代語訳】菜の花のまつさかりな時期は、立春から七十五日のことだなあ。

方鼎

（香村彩）

【本文】

院々の梅や秀でし花くばり

阿籟

【季・季語】春（梅）

【作者】阿籟 「有松 竹屋庄九郎」(『諸国人名録』B本)。「はなのわたり」に一句入集。『あさぢ酒』に入集。

【語釈】●院：周囲に塀をめぐらした大きな構えの家。●秀でし：他よりも優れる。抜きんでる。傑出する。●花くばり：生花で、花の配置を整えること(『日本国語大辞典』)。ここでは、梅の花の並びが整っていることか。

【現代語訳】どの院の梅の花も、素晴らしい並びで咲いていることだなあ。

阿籟

【考察】有松村は慶長十三年(一六〇八)に尾張藩によって新たに開発され、有松絞綿布の業によって栄えた。慶長十三年に知多郡から移住してきた八名として記録されているうちの庄九郎という人物が、有松絞の創始者である竹田庄九郎武則だと伝えられている。二代目庄九郎が改良を加えて一躍有松絞の名をなし、徳川吉綱以来、将軍が替わるごとに綿布を献上するまでになった(『有松町史』)。

本句の作者である阿籟について、『諸国人名録』には「竹屋庄九郎」と記されている。しかし、「絞染職取締定簡条書」や「絞染職株定書」(ともに竹田嘉兵衛氏所有、『有松町史』所収)に「竹田庄九郎」の名は見えるが、「竹屋庄九郎」の名は見当たらない。また、竹屋氏の名は「竹屋吉兵衛」の名があるのみである。このことから、阿籟は竹田庄九郎ではないかと推測してみたいが、これ以上の証拠は見当たらない。断定は避け、なんらかの関係があった可能性を示唆するにとどめたい。

(香村彩)

## 【本文】

鶯に起かつた日やこころまめ 甫鶴

【季・季語】春(鶯)

【作者】甫鶴 有松・村田屋七右衛門。文政七年『いははた集』に「春の野に遊ぶや霍は年がしら」という句がある。

本句が文政八年『あさぢ酒』に所収(『板倉塞馬全集』)。文政十一年『はなのわたり』に「となりからくれる時分の茶の匂ひ」という句がある(『西三河の俳人 中島秋挙』)。

【語釈】●起きかつ…『あさぢ酒』の表記は「起勝」おきかつである。鶯が鳴くよりも早く起きた、ということか。●こころまめ…心がまじめでしつかりしている。甲斐甲斐しい。一月の朝鶯つけにいそぐらむ／花咲けりと心まめなり」（阿羅野・員外・荷兮）。「旅に寝てこゝろまめなり子規」（榎堂句帖二）・文化十年癸酉）。

【現代語訳】鶯が鳴くよりも早く起きることができたなあ。我ながらよい心がけである。

甫鶴

（加藤希）

【本文】

嫌はれて来しがしづかにかへる猫 金毛

【季・季語】春（猫）

【作者】金毛 「尾張・鳴海中嶋 高嶋周之助」（『嘉永人名録』塞馬筆写本。三河以外の俳人住所録）。文政十一年『はなのわたり』に「した草に律を持て茂りかな」という句がある（『西三河の俳人 中島秋挙』）。

【語釈】●しづかに…静かに。●かへる猫…帰る猫。この句の場合は、どこかへ帰っていく猫ではなからうか。一句はこの語句で季節を表していることから、恋をして帰る猫という意味合いがある。「かはゆさや雪を負ねてかへる猫」（許六宛去来書簡・荷兮）。

【現代語訳】恋をしに來たけれど、相手の猫に嫌われたので肩を落としてすこすこ帰ってゆく猫。 金毛

【補注】

この句は「猫」という語のみで春を示している。その前提として、春は発情期の猫が徘徊し恋をする季節であり、「猫の恋」という語句が春を表す語となっている。『俳句辞典 近世』の「猫の恋」という項目を引用する。

## 「猫の恋」

季語（春） 猫の妻・恋猫・浮かれ猫。春になると屋根や床の下などで、異性をもとめる猫の赤ん坊が泣くような声が聞かれる・何日も家をあげ、傷ついたり、やつれて帰ってきたりする。和歌連歌にはなく、芭蕉がとりたてた題である。

猫の妻へつゐの崩よりかよひけり 芭蕉（六百番発句合）

うき友にかまれて猫の空ながめ 去来（猿蓑）

羨まし思ひきる時猫の恋 越人（カ）

化るなら手拭かさん猫の恋 一茶（七番日記）

越人の句は、芭蕉が「心に風雅あるもの、一度口にいでずといふ事なし。かれが風流、ここに至りて本性をあらはせり」と評価したことが『去来抄』に記されている。「猫の恋」が激しいものであったことが二句目「思ひきる」から推察され、それゆえに恋をした猫が傷ついたり、やつれて帰ってくる」と表現される。芭蕉が越人の「猫の恋」の句を批評し、恋する猫を題材として句境を広げた。

（加藤希）

## 【本文】

つきあはず膝や余寒の杉曇り 巴東

【季・季語】 春（余寒）

【作者】 巴東 「大野 浜寫増太郎」（『諸国人名録』B本）。常滑市大野。文政七年『いほはた集』に「寺入の児に馴染

せる鹿子かな」、文政八年『あさぢ酒』に「親鹿のするよふになる鹿の子哉」という句がある（『板倉塞馬全集』）。文政七年中根棟老四十賀の梅逸商『一枝スリモノ』に発句を寄せた。文政十一年『はなのわたり』に「焼しほはならべたなりに売れもせず」という句がある。

【語釈】●つきあはず…近く向い合わせる。「花守や白きかしらを突あはせ」（炭俵・去来）。●余寒…立春後の寒さ。寒があけてもまだ続く寒さ。残寒。「箔うちのはくもこぼれも余寒かな」（曙庵句集・文化十四年）。●杉曇り…不明。類似した表現に「花曇り」という言葉があり、桜の咲く四月頃の曇の天気を用う。

【現代語訳】

ひどく寒い余寒の曇り空の下、膝を突き合わせて座る。桜ではなく杉の木が生えている春の曇り空は、花曇りならぬ杉曇りとも言おう。

巴東

【補注】

【作者】に載せた、文政十一年『はなのわたり』の「焼しほはならべたなりに売れもせず」という巴東の句に関して、『蘆蔭集』三（同年如月五日於刈谷十念寺追善秋拳翁脇起之百韻）にはこの句が支方の句として載っている。配列順で作者名が相違するのは以下の三句である。

『はなのわたり』

つどつどくぜる夏の黄鳥

士徳

焼しほはならべたなりに売れもせず

巴東

大きな空言のはげる媒

支方

## 『蘆陰集』三

つどくくぜる夏の鶯

巴東

焼しほはならべたなりに売れもせず

支方

大きな啞のはける媒

士徳

『蘆陰集』は塞馬による句記録であり、刊行された『はなのわたり』とは相違するため、本注釈では『はなのわたり』の記述を採用する。

(加藤希)

## 【本文】

明そむる夜や花くらみ花あかり 吳江

## 【季・季語】春(花)

【作者】 吳江 「大野 平野彦右工門」(『諸国人名録』B本)。常滑市大野。平野氏。三河荻原(吉良町)の人。文政七年『いほはた集』に「隴(龍の部分)が竜」夜や渡ししまふて舟のもの」という句がある。同句が文政八年『あさぢ酒』にもある(『板倉塞馬全集』)。文政十一年『はなのわたり』に「覆かかる合飲の梢を笠にして」「露は草のもち前なれど女郎花」という句がある(『西三河の俳人 中島秋拳』)。

【語釈】 ●明そむ：明け初む。夜が明け始める。「明けそむるたかねの桜ほのぼのとよこ雲にほふ春の山かぜ」(拾遺風体和歌集・春歌・曙花・法眼慶融)。 ●花くらみ：暗い所にある花、という意か。「花暗く岩ほの躑躅明らかに」(其富士や(歌仙)・元禄六年五月二十九日 五月晦日会)。「紙燭して垣の卵の花暗うすな」(鳳朗発句集・卵の花)。 ●花あ

かり：花が咲き乱れて夜でもそのあたりが明るく感じられること。特に、一面に咲く桜が闇の中でもほのかに明るく見えること。「夜ざくらやいふにいはれぬ花あかり」（秋拳句文帖・文化十四年乙丑 春）。

【現代語訳】 白々と明け始めた夜のことよ。桜が暗がりに咲いているが、咲き乱れているのであたりがほのかに明るく感じられる。

呉江

（加藤希）

【本文】

寐た貌を見ばやつばめの初やどり 公雅

【式目】 春（つばめ）。

【作者】 公雅 『諸国人名録』には、A本・三河に「荊谷藩中 高須新八良」、B本・三河に「同（※荊谷）城内 高須新兵衛」、C本・三郎に「同同（※三河刈谷）城内 高須新兵衛」とある。『西三河の俳人中島秋拳』によれば、秋拳没後十三年の天保十年に、秋拳門人の茂陵、東雅、宜彦らによって建立された句碑（刈谷市市原神社の南方にあり）の裏にも公雅の名が見える。また同書所収『はなのわたり』巻末注には「公雅 高須新八。荊谷藩士。嘉永五年没、年五十六。」とある。『はなのわたり』には、「題花」に「花になれ人に馴たる鴉かな」の句と、「丁亥（※文政十年）春二月五日於十念精舎小祥忌追福脇起之百韻」への参加が確認できる（「こぼれしままにかはくねり土」）。また、『いははた集』に「松植てしさればすぐに霞けり」の句が、『あさぢ酒』に「笠にちる花をよしの、みやげかな」の句が見える。また、『蘆陰集』三に「同年（※文政十）如月五日於刈谷十念寺 追善秋拳翁 脇起之百韻」（※『はなのわたり』に見えるものと同じ）と、「同年（※天保三）皐月九日於盤立書院興行曙庵超祥忌追福脇起之百韻」への参加が確認できる（『いははた集』以下は『板倉塞馬全集』による）。

【語釈】●はつやどり やどり…すまい。仮の住居。一時しのぎのすまい。「家居のつきづきしくあらまほしきこそ、仮のやどりととは思へど」（徒然草第十段）。一句の中に「つばめ（つばくら）」と「やどり」を詠み込んだ句としては、「大和見にまかできぶらふとて、『つばくらにしほしあづかるやどり哉』といへるに、我も猫に別おしみて」（其袋・園女・432詞書）の例がある。

【現代語訳】寝た顔を見たいものだ、今年初めて来たつばめの巣の中の雛たちの顔を。

（狩野一三） 公雅

【本文】

鶯にひとりづつこす土橋かな

仮物

【式目】春（うぐいす）。

【作者】仮物 『諸人名録』には、A本・三河に「同（※荊谷藩中）二ノ宮理兵衛」、B本・三河に「荊谷 白木や藤吉 二宮伊兵衛トキク」、C本に「三河荊谷 白木や藤吉」とある。『はなのわたり』には、「題花」に「ちからみせて咲かつ花の若木かな」の句と、「丁亥（※文政十年）春二月五日於十念精舎小祥忌追福脇起之百韻」への参加が確認できる（「わかれしのちはあけぬ北口」）。また、『いははた集』に「ひらきやすし遣ふにやすし持扇」の句が、また『蘆陰集』三に「同年（※文政十）如月五日於刈谷十念寺 追善秋拳翁 脇起之百韻」（※『はなのわたり』に見えるものと同じ）への参加が確認できる（『いははた集』以下は『板倉塞馬全集』による）。

【語釈】●土橋…木などを組んでつくった上に土を覆いかけた橋。つちはし。「追手の口は土橋可然也」（築城記）。

【現代語訳】鶯に向かって一人ずつ越していく土橋であることよ。

仮物

（狩野一三）

## 【本文】

船道と行ちがひなり雪解水

支方

【式目】春（雪解水）。

【作者】支方 『諸国人名録』B本・尾張に「同（※大野）光明寺」とある。光明寺は、愛知県常滑市大野町にあり、現在には浄土真宗東本願寺派に属している。『西三河の俳人中島秋拳』巻末注には「支方 知多大野光明寺院主」とある。『はなのわたり』には、「四季雑詠」に「はな萩や十歩にあまるかくれ水」の句と、「丁亥（※文政十年）春二月五日於十念精舎小祥忌追福脇起之百韻」への参加が確認できる（「大きな空言のはげる媒」）。『いははた集』に「春風や釣瓶ながらの洗ひ簀」の句が、『あざぢ酒』に「赤いのは唐がらしなり八重葎」の句が、また『蘆陰集』三に「同年（※文政十）如月五日於刈谷十念寺 追善秋拳翁 脇起之百韻」（※『はなのわたり』に見えるものと同じ）への参加が確認できる（『いははた集』以下は『板倉塞馬全集』による）。但し『蘆陰集』では、『はなのわたり』に巴東の句として載る「焼しほはならべたなりに売れもせず」が、支方の句として載っている。詳細は本訳注の「つきあはず膝や余寒の杉曇り 巴東」の註釈を参照されたい。

【語釈】●船道：船舶が通行する道。航路。「あぢきなや何ゆへいたうこがすらん／むすめをつるるけふの舟みち」（守

武千句 姉何第四・385／386）●雪解水：ゆきげみず。雪どけの水。「夜間瀬の流ハ雪解水を交へて動々と鳴りわたり、

さながら矢のごとし」（夜間瀬路）。「飯綱おろしの雪解水、黒けぶり立て、動々と鳴りワたりておし来たりしに」（おらが春）。なお、句の中に「雪解水」という一語で詠み込んだ例は、管見の限りでは古典俳文学大系所収のものには見当たらない。明治期以降になると、「雪解水書架の上より流れけり」（新傾向句集・河東碧梧桐・619）などのような例が見られる（栗田靖編『碧梧桐俳句集』（2011年10月 岩波文庫）による）。

【現代語訳】（遡っていく）川船の航路と行き違いに、雪解けの水が下流へ流れて行く。

支方

(狩野一三)

## 【本文】

山吹のじらりと藤の裳かな

士長

【式目】 春（山吹、藤）。

【作者】 士長 伝未詳。

【語釈】 ●じらり…多く「と」を伴って、全部もれなく行きわたるさまを表す語。「町衆のつらりと酔て花の陰／門で押るる壬生の念仏」（炭俵・野坡／芭蕉・17／18） ●山吹：藤…：山吹と藤を一句に詠み込んだ句としては、「今日の藤山吹なしに覚束な」（蕉門名家句集・土芳・815）、「やまぶきや藤の抱つくうしろ影」（葎亭句集・三宅嘯山・518）などがある。

【現代語訳】 あまねく藤棚の下には、山吹が裳裾のようにじらりと咲き誇っている。

士長

(狩野一三)

## 【参考文献】

和歌・俳諧の引用は、断らない限り新編国歌大観、新編私家集大成、古典俳文学大系のCD-ROMによる。

新編日本古典文学全集『松尾芭蕉集②』（2008・小学館）

『西行全集』（昭和57・日本古典文学会）（陽明文庫本山家集）

和歌文学大系『山家集／聞書集／残集』（版本系山家集）

新日本古典文学大系『芭蕉七部集』（1990・岩波書店）

- 加藤定彦・倉島利仁編著『柿園嵐牛俳諧資料集』（2018・嵐牛俳諧資料館）
- 新日本古典文学大系『方丈記 徒然草』（1989・岩波書店）
- 日本歴史地名大系『愛知の地名』（1981・平凡社）
- 安藤英方編『近世俳句大索引』（昭和三四年・明治書院）
- 大儀義雄『青々卓池と三河俳壇』（平成元年・名著出版）
- 大儀義雄『俳人鶴田卓池』（1986・本阿弥書店）
- 谷澤靖・永田友市『西三河の俳人 中島秋拳』（昭和五七年・西村書房）
- 『愛知県史 資料編20 近世6学芸』（平成二四年）
- 『新編岡崎市史 近世学芸13』（昭和五九年八月・新編岡崎市史編集委員会）
- 『碧南市史料57 三河の俳人 中根棟堂』（平成二年三月・碧南市史編集会）
- 『名古屋区史シリーズ⑥ 緑区の歴史』（榊原邦彦・1984・愛知県郷土資料刊行会）
- 『有松町史』（1956・有松町史編纂委員会）
- 深津三郎編『板倉塞馬全集』（平成十五年九月・犬塚謄写堂）
- 同 『続板倉塞馬全集』（平成二四年・犬塚謄写堂）
- 栗田靖編『碧梧桐俳句集』（2011・岩波文庫）

////////////////////////////////////

平成三十年度 稀書の会実地踏査

【踏査日時】平成三十年十月二十一日（日） 午前八時三十分～午後七時

【踏査内容】 テーマ・詩歌と旅

奥の細道の終着点である大垣市をたずね、揖斐川で桑名とつながり、また中山道と東海道を結ぶ美濃路の宿でもある様子を体感し、奥の細道むすびの地記念館にて芭蕉関係古典籍を拝見する。次に、古典詩歌と深く繋がる俳句の世界を、俳句協会の行事を体験することで理解し、国際的な広がりを含めてある俳句の力を講演を通して感得する。さらに、近隣にある美濃国の歌枕の地、垂井と関ヶ原を訪ね、奈良時代から中世、江戸時代と、中山道を通った旅人たちの事蹟を見、文学作品の世界を実感する。

【スケジュール】

名古屋駅（午前八時三十分）

←

大垣

①奥の細道むすびの地記念館見学（午前九時三十分～午前十時三十分）

学芸員上嶋康裕氏より企画展示（「真筆にみる芭蕉と大垣」）説明

←

②国際俳句交流協会中部大会（大垣市総合福祉会館）（午前十一時～十二時三十分）

有馬朗人氏講演など聴講

←

③八幡神社湧水、水路、芭蕉碑など踏査

←

青墓、南宮山をJR車窓から遠望

←

垂井

中山道垂井宿（午後一時五十分～午後三時三十分）

④ 歴史民俗資料館見学

⑤ 垂井の泉

⑥ 南宮神社石鳥居

⑦ 本龍寺（芭蕉来訪の寺）

⑧ 長屋氏屋敷跡（後光厳天皇行宮『小島の口ずさみ』）

関ヶ原

中山道関ヶ原宿（午後四時～六時）

⑨ 不破の関資料館（午後四時二十分～午後四時五十分）

⑩ 不破の関跡

⑪ 関の藤川

⑫ 自害峯の三本杉

←

⑬ 春日神社月見の宮大杉

←

関ヶ原駅

←

名古屋駅（午後七時解散）

**【参加者】**

伊藤伸江・狩野一三・加藤希・香村彩・田中裕衣・次森裕香・脇田透子・山本美静・城間瑚海・倉光里奈

